

捨てたもんじやない横浜の川

かわを考える会のドブ川イベント

白瀧敏弘

一 はじめに

横浜の川はドブ川だ、と思っている人が多いという（「都市河川についての意識調査」横浜市、一九七八年）。

なるほど、ドブ【溝】とは「下水」みぞのこと。街で出会う多くの川は、にごっていてコンクリートとフェンスに囲われた排水路だ。

「こういうのをドブ川ってんだ。都市の川の宿命だよ」

「そうかなあ……。ドブ川だって言っても、まだまだ見捨てたもんじやないんじゃない？」

と、ドブ川の可能性を認める後者の意見の人たちが、「よこはまかわを考える

会」に集まっている。

「かわを考える会……？なんだ、実（み）の方は考えないの」と言われたこともあったが、ちょっと変わった名前である。

現在、会員約二〇〇人。自治体職員が約三分の一。あとは、小学校から大学までの生徒や先生、建築家、コンサルタン

ト、主婦、自営業、ジャーナリスト……と多彩な顔ぶれ。代表者を決めず、会則もない。月一回の会報発行（図―1）と研究会開催のほかいろいろなプロジェクトをかかえる複合体組織だ（図―2）。

新聞などを読んで「大岡川でカヌーレースをしたり、上大岡で川そうじをしたりする、イベントの得意な市民グループ」

との印象でご存知の方もいるだろう。

しかし、この「かわの会」もはじめは自治体職員二十七人の集まりであった。ここでは、一九八五年で四年目になるこの会のことと会の発展の原動力となつたいくつかのイベントについて紹介する。

二 ドブ川を見捨てるな

都市の川にはいろいろな顔がある。

目の前のドブ川も、たどりたどって源流までさかのぼれば、夕暮れとともにホタルが舞い出る自然が待っている。

また、河口に下れば、ミナトヨコハマを感じさせる運河の風情がまだ残る。

そして、見落とせないのは、源流から

一 はじめに

二 ドブ川を見捨てるな

三 よこはまかわを考える会のスタート

四 会の目的と組織運営について

五 イベントによる会の発展―横浜縦断カヌーフェスティバルを中心として

六 イベントは効果も大きいが準備が大変―自主性が問われるイベントへの参画

七 イベントに必要なもの

河口まで、自然と街とが織りなす素敵な場所が随所にちりばめられていることがある。

しかし、ひとたび大雨ともなると、川はその表情を変える。特に、川の際まで家が建ち並んでいる都市では、濁流が渦巻く様は、恐ろしいものだ。

そして、あふれば、大きな被害となる。川の流域の都市化が原因だとしても川が悪者にされ、フェンスを必要とするほど川は深く掘り下げられていく。

人々の心からだんだんと、川への愛着が失せる。工場からは廃液、家庭からは生活排水が流され、川はみるみる汚れていく。ゴミが捨てられ、臭いからと苦情が出る。



よこはま がわをを考える会ニュース

NO. 43

60年9月1日

発行所：よこはまがわをを考える会 編集：白崎敏弘・横浜港北區篠島北2-5-34 〒431-8659 (夜) 連絡先：宮本美・横浜市金沢区並木3-5-3-404 〒045-783-7638

第40回定例研究会

河川にフェンスは必要か？

セイフティー・ミニマムの法律 吉命

講師 **林 良二** (横浜法律事務所 特設1)

日時 **9月20日(金) 6:30 - 9:00**

場所 **職能開発センター** PHONE 651-2195

資料代券 **500円**

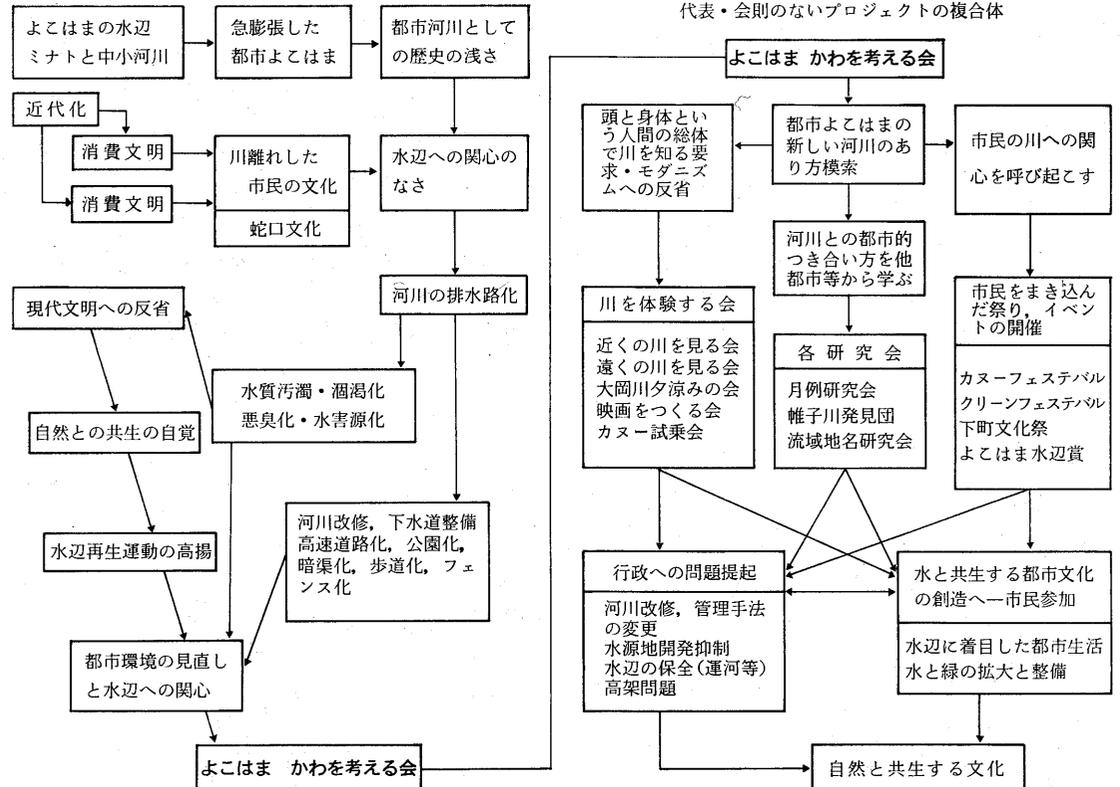
問合せ **森 清和** PHONE. 045(752)2645, 045(041)1904

川岸が開放され、川沿いを歩くことができるようになると、高いフェンス(柵)が気になりだす。ハードな環境整備も必要だが、ソフトな人と川とのがかり合いをもとめる水辺再生にとっては、最初に何とかしなければならぬ課題であろう。デザインや色では根本的な解決にはならない。フェンスの高さ1.2mは「自歩道防護柵(危険部)の設置基準」にもつくものであるが、せめて低くて「サリイメン」にならないものであろうか。川が都市の背景となっている京浜川や、柳川などは、落ち込まずに、なまと思ふようにそこにもあまり見られない。川がせき止り、川のつき合いがあれば、誰も柵を要求しないであろうか。●安全対策は、人命にかかわるためになかなか正面切って議論しにくい問題であるが、何れも本当の「セイフティー・ミニマム」なのか、市民と行政あるいは市民-行政間で活発な議論が行なわれたい。●今回はこの問題を深めてゆくための予備学習として、転落事故の係争事例等にもとづいて、河川の安全対策や管理問題、法律の分野から取り扱いたい。●安全問題は水害や公園管理の問題でもあり、会員、会員外を問わず、いろいろな立場の方の参加をお願いたします。(文責 森)

(注) 8.27の早稲川水害訴訟判決についても、コメントしていただければ幸いです。

中野川五郎舟泊より撮影された水辺の風景(磯谷俊徳)

図一 2 よこはまかわを考える会



愛着どころではない、さらわれ者だ。「でも、川をこんなにしてしまった原因を考えると、川にフタをし、掘り下げを進めていくには忍びない。何とか川を生かせないものか」と、同じ悩みをかかえる行政担当者の間に、川の問題を研究するグループがいつしかできた。

三 ― よこはまかわを考える会のスタート

「かわを見る会」のメンバーたちは、一年とたたないうちに、もっと多くの人に呼びかけ、会を発展させることを考えた。

それは、会発足後の活動によって、全国の水辺再生運動の盛り上がりを感じたからである。

特に、第一回水都再生シンポジウム全国集会を成功させた、「大阪をあんじょする会」の事務局長、高田昇氏に会えたこと、そして大阪、長崎、小樽など、都市の再生を水辺に求める、活発な市民

運動の盛り上がり、熱っぽく聞かされたことが大きな刺激となった。

他に、東京の市民グループ「三多摩問題研究会」の野川湧水調査を見学したこと。横浜と同じ大都市、京都の川の見学会に、会員のほとんどが参加したことなどが、会の発展への自信につながった。

昭和五十七年二月、「かわを見る会」を発展的に解消し、「よこはまかわを考える会」が発足した。

この第一回定例会に参加したのは、横浜市と神奈川県職員の約四〇人。この時、会員になったのは、わずか二十七人であった。

四 ― 会の目的と組織運営について

さて、イベントによる会の発展を述べる前に、ユニークなこの会の組織運営を紹介しよう。

- 会の目的
- ・かわについて勉強しよう
 - ・かわで遊ぼう
 - ・かわを見よう
 - ・私たちの考えを皆に知らせよう
- をスローガンに、気軽に、しゃちこぼらずに、楽しく川とつき合っていける、肩のこらない会にしていこう、というもの。

昭和五十六年のこと、小栗康平監督の『泥の河』がキネ旬で第一位をとった年である。

とにかくいろいろな川を見てみよう、と会をつくった。称して「かわを見る会」。会員約一五人。「よこはまかわを考える会」の前身だ。

昭和五十七年二月、「かわを見る会」を発展的に解消し、「よこはまかわを考える会」が発足した。

この第一回定例会に参加したのは、横浜市と神奈川県職員の約四〇人。この時、会員になったのは、わずか二十七人であった。

さて、イベントによる会の発展を述べる前に、ユニークなこの会の組織運営を紹介しよう。

②—組織運営について

会員全体が自主的に運営に参画し、事務も分担していくことを原則とする。

だから、会の代表は誰で、事務局は誰が、という決め方はしない。また、会員の自主性を尊重し、会に入ると従わなければならない規則、つまり会則というものも特に定めない。

そのかわり、誰でも参加でき、自由に意見が述べられる「事務局会議」というものを毎月開き、ここで、各プロジェクトの予定、会報の内容など、実質的な組織の運営を行っていく。

そして、もう一つ、この「かわの会」でユニークなのは、いろいろな活動の一つ一つが、それぞれ独立採算を原則としていることである。

だから、「かわの会」全体の活動、つまり、会員の年会費によって運営されているものは、月一回の事務局会議と会報の発行。そして、年一回ある総会ぐらいのものである。

③—プロジェクトについて

やりたいことがあったら、事務局会議などで相談し、会報や定例研究会で皆に呼びかける。そして、集まったメンバーでプロジェクトチームを作り、自主的な運営をする。

各プロジェクトは、活動内容を会報などで会員に知らせ、いつでも、誰でも参加できるようにする。これがいまよくいくと、会員の夢の数だけ、プロジェクトができることになるのだが……。

五

イベントによる会の発展—
横浜縦断カヌーフェスティバルを中心として

当初二七人でスタートした「かわの会」も、これから紹介する、いくつかのイベントを行う前は、行政職員の自主的勉強会と大して違いはなかった。

①—夕涼み会

夏の一夜、運河に屋形舟を浮かべて一杯やってみよう——。こんな夢を実現させた、かわの会の最初のイベント。

場所は大岡川河口。屋形舟ならぬ釣舟を、商店街のちようちんで飾り立てた。

お店の名前がよく目立つ……。

ちよつと恥ずかしいけど、道行く人にこんな川の楽しみ方のあることを知ってほしい——という気持ちであった。

「えっ、あの大岡川で夕涼み？ だいじょうぶ？ においなんか」と大方の人は思うかも知れない。でも、野毛の都橋あたりで宴もたけなわの我々を、橋行く人はげげんな顔で見下ろしながらも、うらやましそうに立ち止まる。

そう、舟のちようちんをくすぐるのは、まさしくハマの川風だ。においなんかちよつもしない。それに、見上げる

柳の向うの都会の騒ぎも届かない。静かな川面にネオンがゆらめく……。

これは、都市の楽しみ方のもう一つの発見——とでも言うのだろうか。

とにかく、この素晴らしい経験は、会員だけでなく、その友達や、新聞で聞きつけた一般市民の人たちを魅了し、みんなを仲間にならせた。

②—横浜縦断カヌーフェスティバル

運河として使われなくなった横浜の運河——。それは、ポカロンとしていて、ホッと息のつけるような場所。ぼんやり眺めていても、真剣に釣糸をたれていても、似合ってしまう。そんな不思議なところ。そして運河は、港とともに繁栄した横浜の歴史を物語る。

カヌーレースを、この横浜の運河でしてみたい、という大胆な企画は、会の発足当時から、会員の頭にあった。

しかし、どこから手をついたらよいのやら……。

まずは——
⑦開催趣旨をはっきりさせる

「ともすれば忘れられがちな運河の素晴らしさを、カヌーレースを行うことでレースに参加する市民と、それを見る市民によって再発見してもらおう。スローガンは「よみがえれ運河」……。」と、このように、何のためにこのフェス

写真—1 夕涼み会の屋形舟



図一 3 横浜縦断カヌーフェスティバル

よみがえれ運河!

10月28日(日)

10:00 カヌーレース スタート

Aコース 市民ヨットハーバー 大岡川 → ゴール

Bコース 中村川三吉橋 中村川 → 弁天橋

水上音楽祭 10月28日(日)10:00より

三河川清掃 10月21日(日)13:00より

第3回横浜縦断カヌーフェスティバル

時間	内容
8:00	開会式
8:30	選手スタート地点へ移動
10:00	スタート
11:30	それぞれゴール
12:30	閉会式
13:140	フェスティバル終了

主催 第3回横浜縦断カヌーフェスティバル実行委員会(神奈川県カヌー協会、ファーストアクションクラブ、よこはまかわを考える会)
 協賛 神奈川県、横浜市、横浜商工会議所、横浜青年会議所、神奈川県新聞社、市民ヨットハーバー
 協賛 横浜市環境保全協議会、野毛商店街協同組合、上大岡再開発協議会、横浜市従業員労働組合

ティバルを行うのかをはっきりさせる。

④スタッフを募る

この趣旨に賛同し、実際に動いてくれるスタッフを募集する。実行委員会形式とし、かわの会の会員だけでなく、一般市民にも呼びかける。

⑤企画書(案)を作成する

集まったスタッフで、どんなレースにしたいのか、問題は何か、などを話し合い大筋を決める。

a レースのコースは、根岸湾をスタートし堀割川、中村川を経て、大岡川河口をゴールとする(三回目からは、中村川三吉橋スタートのコースもできた)。

b 海から海へ抜けるので名称は「横浜縦断カヌーフェスティバル」

c 開催は、秋の休日の満潮時(大岡川が分岐するあたりがかなり浅いので)。

d 参加予定は約一〇〇艇、約一五〇人などを決め、フェスティバル開催の趣旨とあわせて企画書(案)としてまとめておく。

⑥スタッフの役割を決める

会計、広報、渉外(これは全員)、そして、レース以外の催し物を行う場合はその担当など。

⑦関係機関と調整をする

a 実際にカヌーというスポーツがこの

運河で行うのか、技術面、それとレースへの選手の参加などについて神奈川県カヌー協会と調整をする。

幸い、実行委員として、フェスティバルに参画してもらえた。

b レース当日、選手はカヌーを車で運んでくる。約五〇台。広い駐車場が必要となる。必然的にそこが会場となる。スタート地点かゴール地点にほしい……。桜木町駅前のあき地はどうだろうか→国鉄、MM21事業関係団体などと調整をする。

c 公共空間である河川および港の一部を使用するため、各所管の行政機関と調整する→海上保安庁、市港湾局、首都高速道路公団、県警など。

d スタート地点は堀割川河口である。そこまでカヌーはトラックで、選手はバスで運ぶ。そして、スムーズに乗艇できる場所が要る。河口のヨットハーバーのスロープはどうだろうか→市民ヨットハーバーにお願いする。

⑧協力者を探す

カヌーフェスティバルは市民のボランティアによる手づくりのもの。しかし、そうはいつても、これだけの規模のイベントを行うにはかなりの資金を要する。レースへの参加費だけではとてもまかなえそうにない。フェスティバル開催の趣